有島は來月早々、原町の借家へ引越すと言つた。

『そんならそのあとで、此の家を僕に貸してくれませんか』

有島はニコ〳〵笑ひ出した。

『考へて置きませう。

しかし弟が當分居る事になつてゐるのですが、亡父の希望通り僕は財産を弟達に分配したんです。其處に掛かつてゐる洋服も弟のですよ』

二時間あまり話した。

『講演會の時には僕も聞きに行きます』

それから僕は毛布を一枚貰つて、それを肩掛のやうに折つて、肩に掛けて辭して出ると新光社へ寸時寄つた。

日々新聞の調理部に、僕は二月程居た事がある。

調理部とは料理部の事で、僕は丼にめしを盛る事を專務にしてゐた。

だから受付の女事務員や、交換手の顏などもまだ覺えてゐた。